九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大学生の依存性が心理的安定に与える影響

岡，誠貴
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/2232321

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 10, pp.7-12, 2019-03-27. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

Bulletin of Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University
Vol. 10, pp. 7－12.

大学生の依存性が心理的安定に与える影響

岡　誠貴　九州大学大学院人間環境学府

要約

本研究の目的は依存性が大学生の心理的安定にどのような適応的意義があるのかを検討することであった。依存性にはポジティブな立場とネガティブな立場があり，本研究ではポジティブな立場に立って検討を行った。先行研究に基づき本研究では依存性を「成人が困難な状況において精神的に他者を頼って心の安定を図る要求」と定義した。本研究では依存希求尺度と依存応答尺度を作成し，大学生328名を対象に質問紙調査を行った。落ち込んだ時に親密な他者に依存をすることによる影響の検討を行い，依存と応答の一致・不一致が心理的安定に及ぼす影響の検討も行った。その結果，依存希求尺度と応答尺度においてそれぞれ４つの因子が抽出された。依存関係において依存を求めること，希求に対する応答が心理的安定に影響を及ぼすということが明らかになった。結果から，依存関係において依存が適応的な機能を果たすためには，相手から適切な応答が得られることが重要であること，気持ちを落ち着けたり整理したりする情緒安定機能においては依存者の要求と被依存者の応答の一致の程度が重要であることが考えられる。

キーワード：依存性，心理的安定，青年期

問題・目的

依存性とは，「『人間対人間の行動についていうもので，社会的行動のひとつの形式であって，他人との接触あるいは，他人からの養護によって生ずる満足に向けられた行動をあらわす』ということ」と定義される（江口，1966）。たとえば，乳児は，自分の欲求を満たすために母親をはじめとする重要他者に向けて依存性を示し，それが満たされることでその対象との愛着関係を構築していく。このように依存性は，依存者の適応や被依存者との対人関係と密接に関わるものである。

青年期の依存性

青年期の依存性については，これまで不適応的なものであると捉えられることがあった。この立場においては，依存性は，本来，乳児の母親に対する獲得欲求であり（津守・稲毛，1960），乳幼児期の重要他者を対象とした依存性が成長とともに減少していき，青年期には依存性を脱して自立性を獲得することが発達の課題と考える。乳幼児期の重要他者への依存が適切に自立へ移行せず，青年期になってなお他者に対して過剰にあるいは従属的に依存を示すことは問題視され，適応との関連においても否定的側面のみが強調される（e.g., 江口，1966；融ら，1993）。また，重要な生活上の意思決定の大部分を他者に委ねたり，他者の意思に過度に従ったりする病理として依存性パーソナリティ障害がある（融ら，1993）。

しかし一方で，人は大人になっても，困難な出来事に直面した時や気分が落ち込んだ時には，自力で問題解決を図るだけでなく他者に精神的に頼ることが心理的な回復において有効な場合がある。青年期の依存の捉え方として，「依存から自立へ移行する」というよりは，依存の対象や様式が変化し，「依存性は成熟したものに変容していく」という捉え方が示されている（田中，2009）。高橋（1968）は依存要求を「道具的な価値ではなく，精神的な助力を求める要求である」と定義し，健康な成人にも生じる要求の１つとして位置づけている。また，関（1982）は依存性を，発達に伴ってなくなっていくというよりは，より成熟していくものであるとした。関（1982）は，「人格に内在化している」「その存在を認めている」「その存在に必要を感じている」「自立性と相補的に存在している」の４つを下位概念とする，「統合された依存性」が成熟した人格に備わっているべきものであるとした。

さらに，これまでに青年期の依存性の適応的意義も検討されている。川森（2012）は，統合された依存性（関，1982）が高い人は，低い人と比べ，会話によって関係を作りやすく，葛藤への対処にも優れており対人適応性が高いことを示した。また，久米（2001）は，大学生を対象に友人への依存性の在り方について自己安定性の観点から検討を行い，統合された依存が高い人ほど自己の安定性が高いことを明らかにした。また，竹澤（2008）は，大学生を対象に依存状況においても自己決定や自律性を失わない自律的な依存の仕方が依存後の自己成長感に及ぼす影響を検討した。その結果，自律的な依存を求めることは，依存後の自己成長感や気持ちの安定を高め，成長阻害感を低めることが明らかになった。青年期においても，他者へ依存性を求めることは，心理的な安定にとって適応的な意義を持つと考えられる。

このように，青年期の適応的な依存性は，乳幼児の依存性のように自らの欲求を代理で満たしてもらったり，病的な依存性のように自らの意思決定を他者に過度にゆだねたりするものではない。あくまでも健全な成人に備わっているものとして落ち込んだ場面や困難な状況において精神的に他者を頼って心理的安定を図ったり，立ち直ったりすることである。

本研究では，依存性を高橋（1968）に基づき「成人が困難な状況において精神的に他者に頼って心の安定を図る要求」と定義する。そして，他者へ依存性を示すことが，大学生の心理的な安定にとってどのような適応的な意義を持つのかに着目する。

依存性と類似した概念に，ソーシャルサポートにおける情緒的サポートがある。情緒的サポートとは「ストレスに苦しむ人の傷ついた自尊心や情緒に働きかけてその傷を癒し，自ら積極的に問題解決に当たれるような状態に戻すような働きかけ」（浦，1992）である。このように情緒的サポートは，他者からもたらされるものであり，心の安定を図るための他者への要求である依存性とは本研究では区別をする。しかし，ソーシャルサポートは，与えられることで，あるいはその存在を認知するだけでも，ストレスの緩和，自尊心の維持や回復を促したり，メンタルヘルスを良好に保ったりするうえで有効であることが報告されている（嶋，1992；山下・坂田，2008）。困難な状況において，「サ

ポートされること」を相手に求める依存性とソーシャルサポートは，密接に関連する概念であると考える。

青年期の依存性と心理的安定

青年期の依存性がどのように顕現化するかについては，恋人への依存性の様式について検討した田中（2009）が参考になる。田中（2009）では，依存欲求を測定する項目として，「病気の時や，ゆううつな時には恋人に心配してもらいたい」や「困っているときや悲しい時には，恋人に気持ちを分かってもらいたい」などが用いられている。また，田宮・岡本（2013）が大学生を対象に行った研究では，依存対象への欲求として自身の気持ちを受容してほしいという内容の欲求が１つのカテゴリとして見出されている。これらのことから，青年期の依存性が，特に精神的に不安定な状況下で，親密な他者に対して精神的な助力を求める要求として表れるものであるといえよう。

ただし，依存性の適応的な意義を考えるうえで，依存者の依存要求と被依存者の応答のバランスを考慮することが重要である。竹澤・小玉（2004）は，依存欲求の高い人は自己や他者への信頼感を持ち，それをもとに他者と信頼関係を築くことができることを示唆した。渡辺（2002）はこのような親や友だちなどの他者と一定の距離を保ちながら，程よく支えあい，与えあう依存を「よい依存」と呼んだ。「よい依存」は，発達段階にふさわしい対等な立場で支えあう，親密な関係で示される成熟した依存である。対照的に，上下関係をもとに自分本位に他者をコントロールしようとする，発達段階に不相応の「悪い依存」が存在する（渡辺，2002）。「悪い依存」には重要な意思決定を他者に過度にゆだねる依存性パーソナリティ障害も含まれていると考えられている（田中，2009）。悪い依存をしている人たちは対人的な関わり合いを継続できない（渡辺，2002）。また恋人などの親密な他者に過剰依存している人は恋人以外との他者との関係が希薄化していることが考えられている（田中，2009）。

青年期の依存性のポジティブな側面をとりあげた川森（2012）や久米（2001），竹澤（2008）では，依存者が依存を求めた後，被依存者から適切な応答が成されていたかどうかを問題にしていない。しかし，依存関係は２者間の関係性の中で成立するものであると考えられる。

本研究では，依存者の依存の程度だけでなく，被依存者の応答内容についても検討し，青年期における依存の機能と，依存希求と応答との合致についても検討を行う。青年期の依存が適応的な意義を持つためには，依存希求の程度と応答の程度が一致していることが重要であると考えられる。

本研究の検討課題

以上のことを踏まえ，本研究では以下の３つを検討する。第１に，依存希求尺度及び応答尺度を，過去のソーシャルサポート研究の尺度（e.g. 片受・大貫，2014；小牧・田中，1993）を参照し作成する。そして，成人が親密な他者に依存性を示す動機とその機能を明らかにする。また依存性の内容を，依存することで他者に評価されることを求める依存希求，他者に共感を求める共感希求，他者に心配されることを求める心配希求，他者に情緒的な安定を求める情緒安定希求と想定する。第２に，親密な他者に依存を求めることによりどのような影響があるのかについて，心の安定と自己成長感を取り上げ検討する。第３に，依存を求めた時，被依存者からの応答の一致・不一致が依存者の心の安定や自己成長感にどのような影響があるのかを検討する。

方法

調査対象者

大学生328名を対象とした質問紙調査を行った。最終的に，回答不備を除き，また，「落ち込んだ出来事」[i]のエピソードが本研究の目的に合致すると判断され，かつ依存対象との親密度が50以上の男女287名（男性72名・女性215名）を分析対象とした。平均年齢は19.53歳（SD=1.23）で，年齢の範囲は18歳から25歳であった。

調査時期

2017年10月に実施した。大学の講義時間を利用した集団形式で，回答はいずれも無記名で行われた。

質問紙

最初に，過去１年間の学校生活やその他の日常生活で，最も落ち込んだ時のことを想起してもらい，より具体的に体験を思い出せるよう，可能な範囲で内容を記述してもらった。その後，体験を他者に話したかを尋ね，その人との親密度を０～100で回答してもらった。次に，想起した場面で相手がどんな応答をしてくれたかについて依存応答尺度への回答を求め，その関わりによってどのような変化が生じたかについて依存による影響尺度（竹澤，2008）に回答してもらった。そして最後に，その場面で相手に話すことで何を求めたのかについて依存希求尺度に回答してもらった。

依存希求尺度

落ち込んだ時，人が親密な他者にどのような依存性を示すのか明かにするための尺度である。大学生用ソーシャルサポート尺度（片受・大貫，2014），学生用ソーシャルサポート（久田・千田・箕田，1989），ソーシャルサポート尺度（小牧・田中，1993），恋人への依存様式尺度（田中，2009）に基づいて，また独自に「自分の気持ちを整理してほしい」などの８項目を加え，23項目を作成した。下位尺度として，「自分の成果を評価してほしい」などからなる評価希求，「気持ちを理解してほしい」などからなる共感希求，「気遣ってほしい」などの心配希求，「自分の気持ちを落ち着かせてほしい」などの情緒的安定希求を想定した。

依存応答尺度

求めた依存と，それに対する応答の一致，不一致を検討するための尺度である。「依存希求尺度」の「～してほしい」を「～してくれた」に変更し，23項目を作成した。

依存することによる影響尺度（竹澤，2008）

成長阻害感，気持ちの安定，自己成長感の３因子24項目からなる尺度を用いた。

それぞれの尺度において，「１:全く思わない，２:あまり思わない，３:どちらでもない，４:思う，５:強く思う」の５件法で回答を求めた。

結果

分析は全て，HAD（清水，2016）を用いて行った。

依存希求尺度の因子分析

依存希求尺度について最小二乗法・プロマックス回転で因子分析を行った。その結果，表１に示した通り，４つの因子が抽出された。第１因子は，気持ちや考えに共感し味方になることを求める６項目で構成されていることから，「受容希求」と命名した。第２因子は，自分の行いを認め，労うことを求める６

表1．
依存希求尺度の因子分析結果（最小二乗法・プロマックス回転）

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
Factor 1　受容希求（α =.860）					
6.　気持ちを理解してほしかった	**.969**	-.110	-.017	-.027	.791
7.　共感してほしかった	**.783**	-.086	.158	-.067	.641
2.　考えや意見を理解してほしかった	**.725**	.053	-.027	-.054	.491
23. 味方になってほしかった	**.591**	.177	.021	.052	.562
22. 不満のはけ口になってほしかった	**.484**	.096	-.229	.193	.310
17. 自分を受け入れてほしかった	**.441**	.051	.196	.138	.520
Factor 2　評価希求（α =.928）					
14. 自分の成果を労ってほしかった	-.090	**.944**	.005	-.003	.814
9.　実力を評価し，認めてほしかった	-.054	**.869**	.044	.014	.765
20. 努力や心がけを評価してほしかった	.143	**.832**	-.037	-.042	.760
15. 自分の努力や心がけを労ってほしかった	.175	**.810**	-.040	-.030	.763
1.　自分の成果を評価してほしかった	.046	**.771**	-.019	-.012	.607
10. 自分に期待してほしかった	-.176	**.622**	.190	.073	.481
Factor 3　心配希求（α =.895）					
3.　気遣ってほしかった	.001	-.014	**.937**	-.057	.808
8.　気を配ってほしかった	-.154	.085	**.864**	.014	.698
4.　気にかけてほしかった	.138	.013	**.745**	.004	.722
19. 心配してほしかった	.116	.098	**.577**	.060	.578
Factor 4　情緒安定希求（α = .834）					
11. 自分の気持ちを落ち着かせてほしかった	.097	-.030	.000	**.816**	.765
12. 自分の気持ちを整理してほしかった	-.056	.052	-.025	**.785**	.569
5.　気持ちを軽くしてほしかった	.239	-.083	.088	**.568**	.600
因子寄与	6.660	6.583	6.510	5.144	
因子間相関					
Factor1	—	.515	.630	.698	
Factor2	.515	—	.612	.388	
Factor3	.630	.612	—	.558	

表2．
依存応答尺度の因子分析結果（最小二乗法・プロマックス回転）

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
Factor 1　受容的応答（α =.878）					
7.　共感してくれた	**.869**	-.169	.145	-.110	.649
2.　考えや意見を理解してくれた	**.815**	.064	-.011	-.029	.685
6.　気持ちを理解してくれた	**.741**	-.049	.102	.047	.674
22. 不満のはけ口になってくれた	**.637**	.072	-.146	.010	.355
23. 味方になってくれた	**.603**	.091	.042	.089	.582
17. 自分を受け入れてくれた	**.499**	.160	-.055	.211	.554
Factor 2　評価的応答（α =.917）					
14. 自分の成果を労ってくれた	-.143	**.927**	.124	-.074	.766
9.　実力を評価し，認めてくれた	-.027	**.877**	-.132	.081	.706
15. 自分の努力や心がけを労ってくれた	.045	**.804**	.084	-.024	.758
20. 努力や心がけを評価してくれた	.076	**.774**	.057	-.014	.723
1.　自分の成果を評価してくれた	.158	**.763**	-.038	-.072	.639
10. 自分に期待してくれた	-.040	**.573**	-.004	.159	.428
Factor 3　心配的応答（α =.864）					
4.　気にかけてくれた	-.036	-.063	**.953**	.025	.822
3.　気遣ってくれた	.020	.048	**.796**	-.049	.659
8.　気を配ってくれた	-.022	.047	**.771**	.069	.682
19. 心配してくれた	.201	.129	**.420**	-.058	.396
Factor 4　情緒安定的応答（α =.830）					
11. 自分の気持ちを落ち着かせてくれた	.059	-.047	.003	**.918**	.873
12. 自分の気持ちを整理してくれた	-.011	.093	-.010	**.729**	.603
5.　気持ちを軽くしてくれた	.203	.021	.209	**.385**	.520
因子寄与	7.575	7.255	6.610	6.373	
因子間相関					
Factor1	—	.618	.702	.728	
Factor2	.618	—	.587	.623	
Factor3	.702	.587	—	.572	

表3．各変数の尺度得点の平均値と標準偏差および変数間の相関

項目	*Mean*	*SD*	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
依存希求													
1.　受容希求	3.84	0.87	1.00										
2.　評価希求	3.02	1.05	0.51**	1.00									
3.　心配希求	3.31	1.04	0.61**	0.62**	1.00								
4.　情緒安定希求	3.89	0.93	0.67**	0.37**	0.53**	1.00							
依存応答													
5.　受容的応答	4.14	0.71	0.44**	0.12*	0.14*	0.35**	1.00						
6.　評価的応答	3.56	0.85	0.26**	0.46**	0.21**	0.19**	0.61**	1.00					
7.　心配的応答	4.13	0.74	0.27**	0.17**	0.25**	0.33**	0.67**	0.59**	1.00				
8.　情緒安定的応答	3.94	0.81	0.31**	0.16**	0.16**	0.38**	0.72**	0.61**	0.60**	1.00			
依存することによる影響													
9.　成長阻害感	1.78	0.65	-0.08	0.15*	0.08	-0.09	-0.28**	-0.10	-0.18**	-0.22**	1.00		
10. 気持ちの安定	3.81	0.75	0.39**	0.18**	0.23**	0.46**	0.63**	0.47**	0.51**	0.64**	-0.33**	1.00	
11. 自己成長感	3.50	0.78	0.29**	0.26**	0.14*	0.29**	0.46**	0.51**	0.37**	0.49**	-0.11+	0.70**	1.00

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

項目から構成されていることから，「評価希求」と命名した。第3因子は，自分の事を気にかけることを求める4項目から構成されていることから，「心配希求」と命名した。第4因子は，気持ちを落ち着かせ整理することを求める3項目から構成されていることから，「情緒安定希求」と命名した。各因子の信頼性係数を算出したところ，順に，α =.860，.928，.895，.834となり，尺度の信頼性が確認された。

依存応答尺度の因子分析

依存応答尺度について最小二乗法・プロマックス回転で因子分析を行った。その結果，表2に示した通り依存希求尺度に対応する同様の4つの因子が抽出され，それぞれ「受容的応答」「評価的応答」「心配的応答」「情緒安定的応答」と命名した。各因子の信頼性係数は，順に，α =.878，.917，.864，.830となり，尺度の信頼性が確認された。

依存希求及び応答と心理的安定との関連

まず，依存希求尺度，依存応答尺度，及び依存することによる影響尺度の下位尺度ごとに尺度得点を算出した。各変数の平均，標準偏差，及び変数間の相関係数を，表3に示す。分析の結果，ほとんどの変数間に有意な相関関係が認められた。

次に，依存希求と依存への応答，またそれらの一致の程度が，心理的安定にどのように影響するのかを検討するため，依存することによる影響尺度の3つの下位尺度それぞれを目的変数とする階層的重回帰分析を行った。

ただし，表3に示した通り，依存希求尺度と応答尺度の各下位尺度間には，有意な強い相関関係があり，これらすべてを説明変数として投入した場合に，多重共線性の影響が懸念された。そのため，分析に先立ち，依存希求尺度の4つの下位尺度のみを説明変数とし，依存することによる影響尺度の下位尺度3つそれぞれを目的変数とする重回帰分析をステップワイズ法で行った（成長阻害感：$R^2 = .117$，$F = 18.32$，$p < .01$，気持ちの安定：$R^2 = .224$，$F = 40.04$，$p < 01$，自己成長感：$R^2 = .135$，$F = 8.55$，$p < .01$）。また同様に，依存応答尺度の4つの下位尺度のみを説明変数とし，依存することによる影響尺度の下位尺度3つそれぞれを目的変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った（成長阻害感：$R^2 = .133$，$F = 14.03$，$p < .01$，気持ちの安定：$R^2 = .472$，$F = 81.96$，$p < .01$，自己成長感：$R^2 = .319$，$F = 42.97$，$p < .01$）。

また，依存希求と応答の一致度を示す指標として，依存希求尺度と応答尺度の対応する4つの下位尺度間で尺度得点の差の絶対値を算出した。この指標は，数値が小さいほど，希求と応答の一致度が高いことを示す。4つの下位尺度の一致度指標を説明変数として依存することによる影響尺度の下位尺度3つそ

表４．成長阻害感を目的変数とする階層的重回帰分析の結果

変数名	Step1	Step2	Step3	Step4
性別	-.409 **	-.454 **	-.362 **	-.376 **
依存希求				
評価希求		.119 **	.125 **	.093 *
依存応答				
受容的応答			-.229 **	-.233 **
評価的応答			.018	.041
依存と応答の不一致				
心配不一致				-.067
R^2	.074 **	.112 **	.164 **	.171 **
ΔR^2	.074	.037	.052	.007

表５．気持ちの安定を目的変数とする階層的重回帰分析の結果

変数名	Step1	Step2	Step3	Step4
性別	.382 **	.200 *	.014	.010
依存希求				
情緒安定希求		.351 **	.182 **	.160 **
依存応答				
受容的応答			.336 **	.344 **
情緒安定的応答			.306 **	.267 **
依存と応答の不一致				
受容不一致				-.041
評価不一致				.078
情緒安定不一致				-.144 *
R^2	.047 **	.222 **	.513 **	.530 **
ΔR^2	0.047	0.175	.291	.017

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表６．自己成長感を目的変数とする階層的重回帰分析の結果

変数名	Step1	Step2	Step3	Step4
性別	0.96	-0.62	-2.44 *	-2.41 *
依存希求				
受容希求		.152 *	.119 +	.122 +
評価希求		.166 **	.026	.053
心配希求		-.148 *	-.074	-.071
情緒安定希求		.169 *	.095	.080
依存応答				
評価的応答			.321 **	.300 **
情緒安定的応答			.225 **	.218 **
依存と応答の不一致				
評価不一致				.062
情緒安定不一致				-.055
R^2	.003	.134 **	.349 **	.352 **
ΔR^2	.003	.132	.215	.002

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

れぞれを目的変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った（成長阻害感：$R^2 = .106$, $F = 16.42$, $p < .01$, 気持ちの安定：$R^2 = .176$, $F = 14.64$, $p < .01$, 自己成長感：$R^2 = .038$, $F = 3.62$, $p < .01$）。

以上の重回帰分析（ステップワイズ法）により有意な説明変数として選択された変数を採用し，依存による影響尺度の下位尺度３つそれぞれを目的変数とする階層的重回帰分析を行った。結果を表４，表５，及び表６に示す。

表４に示した通り，成長阻害感との関連について，重決定係数は１％水準で有意な値であり，性別，評価希求及び受容的応答が成長阻害感に有意な関連を示していた。成長阻害感は男性の方が高く（$p < .01$），評価希求の高さは成長阻害感の高さと関連しており（$p < .05$），受容的応答の低さは成長阻害感の高さと関連していた（$p < .01$）。

次に表５に示した通り，気持ちの安定との関連について重決定係数は１％水準で有意な値であり，情緒安定希求，受容的応答，情緒安定的応答，及び情緒安定不一致が気持ちの安定に有意な関連を示していた。情緒安定希求の高さ，受容的応答の高さ，及び情緒安定的応答の高さは気持ちの安定の高さと関連しており（いずれも$p < .01$），情緒安定不一致の低さは気持ちの安定の高さと関連していた（$p < .05$）。

さらに，表６に示した通り，自己成長感との関連について重決定係数は１％水準で有意な値であり，性別，評価的応答，情緒安定的応答が自己成長感に有意な関連を示していた。自己成長感は男性の方が高く（$p < .05$），評価的応答の高さと情緒安定的応答の高さが自己成長感と関連していた（いずれも$p < .01$）。

考察

本研究の目的は，青年期の依存性について，その適応的意義を検討することであった。特に，これまでの研究で扱われた依存行動の程度だけでなく，被依存者からの応答と，要求と応答の一致の程度にも着目した。

まず成人が親密な他者に依存性を示す動機とその機能を明らかにするために作成した依存希求尺度と依存応答尺度において，それぞれ同様の因子が抽出され，各下位尺度の信頼性が確認された。このことから青年期の依存性が，相手からの受容や評価，気遣い，情緒的安定を求めるものであることが明らかになった。そして困難な状況や気分が落ち込んだ際に相手に依存することは，実際にこれらの要求を満たす機能を持つことが明らかになった。尺度の因子のうち，評価希求と評価的応答は大学生用ソーシャルサポート尺度（片受・大貫，2014）における評価的サポートの項目とおおむね一致しており，このことからも，依存性と

ソーシャルサポートは密接した概念であると考えられる。また，受容希求，心配希求，情緒安定希求は本研究で新たに見出された因子と言える。

次に，これらの尺度を用いて，依存性が，気持ちの安定と自己成長感，成長阻害感へ及ぼす影響を検討した。

分析の結果，気持ちの安定が，情緒安定希求，受容的な応答，及び情緒安定的な応答によって高まることがわかった。自分の気持ちを整理し落ち着かせることを目的として他者に依存を求めることは，その行動自体に気持ちを安定させる機能があると考えられる。そして，情緒的サポートが心的外傷後の回復に有効であるように（武富・田渕・藤田，2016），情緒安定的な応答を受けたと感じられることで，気持ちの安定が得られるといえる。さらに，情緒安定を求める依存希求と応答の程度が一致しているほど，気持ちの安定がさらに高まることが明らかになった。つまり，情緒安定の依存要求は，相手がその気持ちを感じ，それに応えてくれたと認知することによってさらに気持ちの安定を高めるといえる。このような要求は，被依存者に依存者の意図を認知してもらいやすく，そのような応答も依存者が認知しやすいと考えられる。

また，自己成長感は，竹澤（2008）と同様に，依存希求によっても高められるが，希求よりも，評価的な応答と情緒安定的な応答によって高まることが明らかになった。依存要求に対して相手から評価的また情緒安定的な応答を獲得することによって，自分の気持ちが整理され，自尊感情が補強されることにより，自己成長感を高めることにつながると考えられる。

成長阻害感については，依存に対する受容的な応答によって抑制されることが明らかになった。これは，親密な他者から受容してもらえる経験を通して落ち込んだ体験について肯定的に考えることができ，成長阻害感を低めることにつながるためと考えられる。

しかし，本研究で唯一，依存のネガティブな影響として，自分の行動を評価してもらうことを求めて他者に依存することは成長阻害感を高めるという影響過程も明らかになった。他者から認められたり評価されたりすることを求めて依存しても，受容的な応答が得られなかった時に頼ったことについて情けなく感じたり，後悔したりするためと考えられる。

まとめと今後の課題

本研究は，青年期の依存性について，依存が心理的安定にとって適応的な意義を持つことを明らかにした。特に，依存要求だけでなく，被依存者の応答にも着目した点に意義があると考える。竹澤（2008）では，他者に依存を求めることによって心理的安定を図ることができるという点にとどまっていた。本研究は，依存が適応的な機能を果たすためには，相手から適切な応答が得られることが重要であること，また，気持ちを落ち着けたり整理したりする依存の情緒安定機能において依存者の要求と被依存者の応答の一致の程度が重要であることを明らかにできた。

最後に，今後の課題について述べる。本研究では依存性のポジティブな側面に焦点を当て，依存者側の認知を測定し検討した。しかし，依存者が依存をすることで心理的安定を図ることができたと感じていたとしても，依存性パーソナリティ障害の特徴にもみられるような過剰な依存（田中，2009）や，上下関係をもとに相手をコントロールしようとする「悪い依存」（渡辺，2002）などが生じている可能性が存在する。これらの不適応的な依存性は依存者や被依存者，その他の人間関係にネガティブな影響を及ぼす（田中，2009）。このように依存性には，依存関係におけるバランスの悪さや，被依存者が感じる依存者と親密であるにもかかわらず「頼ってくれない」などの物足りなさという側面もあると考えられる。本研究で明らかになったことも含め，依存者と被依存者の双方からの研究を行うことで依存性が依存者と被依存者の両者の関係性に及ぼす影響過程を明らかにすることができると考えられる。

付記

本稿は，西南学院大学人間科学部心理学科に提出した卒業論文の一部に加筆・修正を加えたものです。卒業研究の計画から執筆，今回の投稿に至るまで懇切丁寧にご指導いただきました西南学院大学人間科学部心理学科の田原 直美准教授に深くお礼申し上げます。また今回の投稿にあたりご助言を賜りました九州大学大学院人間環境学研究院の古賀 聡先生及び研究室の先輩方にお礼申し上げます。最後に調査にご協力いただきました方々にお礼申し上げます。

文献

江口恵子（1966）．依存性の研究．教育心理学研究，14，45-48.
久田満・千田茂博・箕口雅博（1989）．学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み（1）．日本社会心理学会第30回大会論文集，143-144.
片受靖・大貫尚子（2014）．大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討――評価的サポートを含む多因子構造の観点から．立正大学心理学研究年報，5，37-46.
川森美保（2012）．アタッチメントの側面から見た適応的な依存とは．立教大学臨床心理学研究，6，19-29.
小牧一裕・田中 国夫（1993）．職場におけるソーシャルサポートの効果．関西学院大学社会部紀要，67，57-67.
久米禎子（2001）．依存性のあり方を通してみた青年期の友人関係：自己安定性との関連から．京都大学大学院教育学研究科紀要，47，488-499.
関知恵子（1982）．人格適応面からみた依存性の研究――自己像との関連において．臨床心理事例研究，9，230-249.
嶋信宏（1992）．大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果．社会心理学研究，7，45-53.
清水裕士（2016）．フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案．メディア・情報・コミュニケーション研究，1，59-73.
高橋恵子（1968）．依存性の発達的研究：Ⅰ――大学生女子の依存性．教育心理学研究，16,1,7-16.
竹澤みどり（2008）．自律的な依存の仕方が依存後の自己成長感に及ぼす影響について．筑波大学心理学研究，35，65-72.
竹澤みどり・小玉正博（2004）．青年期後期における依存性の適応的観点からの検討．教育心理学研究，52，310－319.
武富由美子・田渕康子・藤田君支（2016）．がん患者遺族の心的外傷後成長の特徴とストレスコーピング・ソーシャルサポートとの関連．日本看護研究学会雑誌，39，25-33.
田宮沙紀・岡本祐子（2013）．青年期における依存性様態の検討――依存対象に焦点を当てて．広島大学心理学研究，13，129-149.
田中純（2009）．青年期後期の恋人への依存性に関する研究――恋人との関係評価及び対象依存との関連から．九州大学心理学研究，10，139-147.
融道男・中根充文・小見山実・岡崎祐士・大久保善朗（1993）．ICD-10精神および行動の障害――臨床記述と診断ガイドライン．（pp. 216-217）医学書院
津守真・稲毛教子（1960）．幼児の依存性に関する研究．教育心理学研究，8，210-220.
浦光博（1992）．支えあう人と人――ソーシャル・サポートの社会心理学．（pp. 58-59）太洋社
渡辺登（2002）．よい依存，悪い依存．（pp. 46-59）朝日新聞社

山下倫実・坂田桐子（2008）．大学生におけるソーシャル・サポートと恋愛関係崩壊からの立ち直りとの関連．教育心理学研究，56，57-71.

[i] 本研究はストレスフルな状況においての他者依存を扱うため，極端に些細な出来事と判断できるもの（e.g. 足をひねった）や，どの程度落ち込んだのか判断しかねる出来事は分析から除外した。また，本研究では親密な他者への依存行動を研究の目的とするため，依存対象との親密度が50以下と回答したものについても分析から除外した。

Influence of university student dependence on psychological stability

Tomoki OKA
Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of this research was to examine what kind of adaptive significance dependence has on the psychological stability of university students. Dependency has a positive and a negative position, and in this research, we considered dependency from a positive standpoint. Based on previous research, this study defined dependence as "a requirement to stabilize the mind by relying on others mentally in a situation where adults are in a difficult situation." In this study, we created a dependency desire scale and a dependent response scale and conducted a questionnaire survey on 328 university students. We examined the influence of dependence on intimate others when depressed and also examined the influence of agreement / disagreement of dependence and response on psychological stability. As a result, from each of the dependent aspiration measures and response measures, four factors were extracted. It became clear that dependency was determined in dependence relation and response to the need to influence psychological stability. From the results, it is important for dependency to play an adaptive function in dependency; it is possible to obtain an appropriate response from a partner and an emotional stability function to calm and organize feelings. The degree of agreement between the responses of the dependent persons is important.

Keywords: dependence, the psychological stability, Adolescence